「別れ間際に思うこと」

法学部
自治行政学科 4年
佐々木　芳文

二〇四七年　真　五九歳

八月十二日　晴れ

今日、妻とケンカをした。私はよく酒を飲みすぎて妻を怒らせる。その度に私は平謝りを繰り返す。妻は怒ると怖い。過去に、パチンコで勝った金を持って商工会の連中とスナックで朝まで飲み明かしたことがあった。ママにのせられ調子に乗った挙句、現金では払えず私のカードでお会計を済ませた。家に帰って「やられたよ。」とその夜の事を妻に話したところ、ボコボコにされた。血にまみれた私を前にして「次は殺すから」と言い払った。

そんな恐妻にベロベロの私は、今日ついに言ってやった。

「飲んだっていいだろが！何もない岩手のド田舎でコツコツ働いて、ただただ親父のつくった借金を返す毎日。韓国の安い焼酎一本ぐらい気持ちよく空けさせろ！」

ボコボコにされた。ボコボコにされたついでに言ってみた。

「俺、肺ガンだってさ。末期だって。だからさ、あと三ヶ月くらい我慢してくれよな。」

結婚して初めて、妻の口をごもらせた。

結婚して初めて、妻の涙を初めてみた。

八月十三日　晴れ

今日は店を締めて、妻と市内で一番大きい病院に行った。街では夏祭りが行われていて、中々前に進めなかった。妻はイライラしていたのかタバコに火を点けた。とたんすぐ消した。「いいよ」って言ったが無視された。

病院に着いて、医師に妻は「佐々木真の診断書を見せて下さい。」と藪から棒に。私の肺をレントゲン写真で確認し、病院を後にした。帰りは私が運転した。

今、妻は「レジ金を確認してくる。」と言って店に出ていった。ズルズル鼻を啜る音が聞こえてくる。泣くなら、もっと遠くに行けばいいのにと思う。ウチは壁が薄いから。

最近、妻は私と一緒になって幸せだったのだろうかと思う。というか私の人生ってどうだ？てなことを考えてしまう。

外が明るくなってきて、鳥のさえずりが聞こえる。

夜はやはり短いと思う。

八月十九日　雨

久々の雨。あれから、妻に怒られることがなくなった。そりゃやはり元気がない。怖いけど、毎日のように怒られていたから、なくなると寂しいものなんだな。そもそも日記を書くようになったのも大学生の頃で、由美と付き合うようになったからだ。始めは、楽しくて仕方なかったな。由美のアパートでキムチ鍋をつついて、締めでラーメン食べたな。片付けで私が床に鍋をぶちまけた時

も、笑って許してもらったな。鼻をかんだティッシュをテーブルに置きっぱなしにしてたら、黙って捨ててくれたな。イケるかなと思って、こっそり由美の財布から千円抜いた時は、さすがに怒られた。でも、そうやって怒られるのがまた嬉しかったりしたな。そういった何気ない出来事を一つ一つ書き留めてた。いつか結婚して、子供が出来て、自慢気に見せてあげようって考えていた。

今じゃこんなケンカだらけの日記、なんの自慢にもならないや。純に、想像通りの日記でつまらない人生の親父だな、なんて思われて終わりだ。

雨がやんだ。虹とかでるかな？

八月二十三日　晴れ

昨日、中学の同窓会があった。同窓会とか十数年ぶりだ。というか地元のやつなんて街に出てスナックに行けば大抵誰かに会う。キープの名前を見て、そいつを呼び出し、金を抑える。そんな感じ。（笑）

今さら何だ、と思いながら適当にそれなりに身支度をして会場へ向かった。いつもの顔ぶれがほとんどだったが、懐かしい顔もいくつかあった。中学ん時、サッカー部のキャプテンで二ヶ月でキャプテンを辞めちゃった大地。バスケ部でイケメンでモテモテの克典。た行がうまく言えない正太郎。などなど。「みんなハゲたなぁ。」とか言いつつ、昔話で盛り上がった。

そこに直樹がいた。小学校からの親友だ。小奇麗にスカーフなんて巻いておしゃれだった。直樹は、大学の時に書いた小説が評価され、一躍人気小説家として名を轟かせた。今では書いた小説が、ドラマ化や映画化なんてされる直木賞作家である。私は直樹が小説家になってから会ってもないし、連絡も取ってなかった。

話しかけられた。

「おぅ久しぶり。ったくしけた顔してんな。聞いたよ、実家継いで頑張ってるらしいじゃん。…調子どうよ？」

聞いてどうすんだ？毎日借金返すのに必死だよ。くたびれたスナックでママと飲んで、家に帰ったら妻に殴られてグッタリだよ。ガンで余命三ヶ月切ったよ。全てをぶちまけたくなったが、ぐっと飲み込み、

「まぁまぁだよ。」

と答えた。

「お前らしいな。」

と笑われて、頑張れよみたいな事を言われて他へ行った。

くやしいな。それしかない。

八月三十日　雨

この頃、半日仕事をこなす体力と集中力がない。やっぱり病気のせいかな。それにしても妻が怖い、くらい優しい。茶なんて出したり、お風呂沸かしたり。

きつい。正直そんなに優しくされると、とうとう俺死ぬんだなって実感が湧いてくる。でも、そうだよな。準備しなくちゃいけないな。葬儀のこととか、店のこととか。そろそろ純に話しなきゃだな。

九月三日　朝

迫る自分の死を通して、息子の成長を感じた。純は、佐々木家の一人息子で小さい頃から結構甘やかしてきたから、自由奔放な正確だ。きっと由美に似たな。顔も結構かっこいいから、全部由美似か…。そんな純も私の死を真っ直ぐ受け止めてくれているみたいだ。

昨日、純は東京から帰ってきて、久しぶりに夜二人で飲みに行った。二人してロックグラスを揺らしながら仕事のこととか、恋人の話とか聞いた。

何でも、ハタチでモデルでハーフらしい。カタカナばっかだな。（笑）ちょっと悔しかったから、負けじと「自分の学生時代はな…」とモテ話を話した。

そんな感じで、二時間くらいして店を出た。家について、純は燗を注ぎながら話し始めた。

「父さん。実はさ、仕事がきつくてさ…辞めてきた。（笑）やっぱ何か違ったわ。上司にペコペコとか性に合わないんだな俺。そんでさ、仕事しながらふと思い出してさ。小さい頃の、父さんの漆にかぶれたぐしゃぐしゃな笑顔とかさ、筆一本で勝負してる背中とかさ、お客への上手くないけど丁寧な説明とか。あのさ、俺ここで雇ってくれないかな？いや、この翁知屋で働かせて下さい。」

おちょこを置いて、真剣な顔で決意を口にした純を見て、目に涙が溢れた。

今から工場（こうば）に出て純に筆をとらせる。仕事がきついと嘘をついてまで、私のプライドを守ってくれた純の成長に父としてきっちり応えなきゃな。

純、ありがとう。

九月十二日　カーテン

私は今、六人部屋の病室で日記を書いている。おととい、工場で倒れてしまってここに来た。結局純に一週間ほどしか仕事を教えてあげられなかった。父として、社長として、情けない。でもあいつは才能があるな。さすが四代続く翁知屋の血筋だ。さすが私の息子だ。なんて言ってみる。冷静になって考えてみて、隔世遺伝だなありゃ。親父は、筆使いが天才的だったもんな。ドンマイ真、御歳五九（笑）

あ～、にしても退屈だ。トイレに行くにも点滴ガラガラ持って行かなきゃならないし、携帯も使えない。本でも読もうかな。

昨日、先生に言われた。とうとう私は死ぬらしい。想定よりガンの進行は速くて、あと一ヶ月…もたないらしい。

九月十五日　雨

ここに、この三日で続々と見舞いが来た。中学、高校の同級生や、商工会の飲み仲間。あんなことしたな、こんなこともあったなとか、いろいろ昔を語り笑いなんかも起きる。みんなある程度想いの丈を話したあと、改めて点滴に繋がれて少し痩せた私を見て、涙を流す。

大学四年の冬、親父がガンで入院してる時のことを思い出した。同じようにみんなお見舞いに来て泣いていた。親父はバカヤローと笑顔で応えていたけど、私は実の所はどのような気持ちなのか、想像も出来なかった。

そして、いざ自分がその立場。いや、素直に嬉しいわ。いや、憎たらしいわ。いやいや。生きてる実感はある。だが彼らが出ていくと同時に実感する。

もう死ぬ。私の人生はもう終わり。

昔、三浦カズに憧れてサッカー選手になりたいと親に話した小学生の自分も、ライブに明け暮れロックミュージシャンを目指した大学生の自分も、そのバンドのボーカル温子に惹かれ、由美に内緒で浮気した自分も。キラキラしてたあの頃の自分を思い出す。

あと数日で全部終わり。

本当に後悔ないか？

コウカイナイカ？

コウカイナイカ？

コウカイナイカ？

……。

何度も、何度も

誰かの声で。

親父の死で継いだ店だけど、必死で支えてきた。お客の笑顔もあるし、飲み仲間とバカやってきたし、妻の由美もいるし、実際俺にはもったいないくらい美人で巨乳だし。立派に成長してくれた純もいる。

世の中には、俺なんか到底及ばない程稼いで、贅沢な暮らしをするやつはいるけど、俺は人に恵まれ充分幸せ。

でも何だろうな。みんな死ぬ時には思うのかな。人としてどうかな。

人生をやり直したい。生まれたときからとか、そんな贅沢は言わない。ただ、親父の死をきっかけにとか、由美が妊娠したからとかじゃなく、自分で人生を決断して、精一杯生きてみたい。あの頃のキラキラが欲しい。

戻りたいです。

モドリタイデス

モドリタイデス

モドリタイデス

…。

九月十六日　晴れ

奇跡って私は信じない。朝の占いでおうし座は二位だったから、三番人気の馬に二万賭けたが外れたし。麻雀もめっぽう弱い。

朝起きて、歯を磨いて、顔を洗って、由美の作ってくれたご飯を食べて、リュックを背負う。歩いて五分、大学に着いた。ハゲあがった教授の単調な話に耳を傾けることなく、八号館の椅子に腰掛けてこの日記を書いている。

一応、携帯で流れるニュース速報で確認してみる。

「野田内閣発足、始動！（二〇一一年九月十六日）」

髪の毛はフサフサだし、顔は漆でかぶれてないし、エーユーとウィルコムの二台体制だし。

私、佐々木真は、大学四年で二三歳…らしい。

九月十七日　晴れ

やっぱり信じられない。今日、温子からメールがきた。

スンマセン。スタジオに着くの遅れそう。都立大学駅で事故があって、東横線止まっててさ。三十分は遅れると思う。みんなにも伝えといて下さい。めんご（笑）

昔古着屋で買ったトートには、スケジュール帳が入ってまして。そこには「九月十七日午後五時横浜ブラックサウンド」って書いてあった。だから一応部屋に立てかけてある懐かしのベースを背負って、記憶を頼りに向かってみた。悟と知也がいた。おせーぇよ、なんて言われました。

温子が着くのを待って、三人で音合わせをした。ゴイステや東京事変のコピー。楽譜が目の前にあって、ともかく指を動かしてみた。

不思議とよく動いた。心臓がバクバクで、悟のギターが、知也のドラムが、ゴリゴリ。

結局、温子が一時間遅れでスタジオに着いた。五、六回音合わせて、スタジオを出た。みんなお酒が好きで、帰りはチェーン店の安い居酒屋でビールやら焼酎やら様々飲んだ。知也のシャツはダサすぎてロックじゃないとか、そんな話で二、三時間つまみにした。

六畳一間の古汚いアパートに着いて、今。

やっぱり信じられない。

俺死ぬんじゃなかったの？

けど、信じられないくらい、

気持ちいい。楽しくて仕方ないって感じだ。

九月二十日　雨

再び二三歳を生きて四日目。私は今、四冊目の日記を書いている。五九歳まで数十冊書き留めて

きた日記はない。前の三冊を見返すと、大学四年の内容の薄い事しか記されていない。妻にボコボコされてとか、ない。というか由美とのデートとか、手料理食ったとか、幸せそうな、青臭い日記がそこにあった。

今日、死んだ親父から電話があった。

「夏休みなんで帰って来なかった？母さん凄く寂しそうにしてたぞ。十月の連休は、顔見せる程度でもいいから、岩手に帰ってこい。」

昔と変わらない、無愛想で、男のくせに少し高い、優しい父の声だった。

「わっかたよ、来月帰るよ。」

と伝えて電話を切った。

親父はまだ生きている。うれしくて、うれしくて、笑顔になって、声を出して泣いた。

九月二十五日　晴れ

スタジオで練習があった。コピーバンドではあるが、俺らのサウンドは、聴く人を圧倒させる力があった。勢いもある。って昔、大学の先輩が言ってくれたから、俺らはミュージシャンとしてデビューする事を夢みている。本当は五十九歳の自分は、みんなこの半年後挫折して、それぞれ就職やら専門学校やらと別々の道を歩いて行くんだよと思いつつ。

でも、とこかで何かに期待している自分がここにいる。きっと今の現状は、神様が地味でダメな人生を歩んできた自分にくれたチャンスだ。なんて三流ドラマのようなセリフが浮かんで、ここに書いちゃったりして。

明日は、学園祭ライブ。気合いが入るな。なんつったって、アミューズのプロデューサーが来るって話だもんな。

んー、寝よ。

ちょっと、サビ前一小節弾いてから。

九月二十六日　晴天

秋が色づき始め、街の景色も赤く染まり、その赤に青い空が…負けず嫌いの…ってダメだな俺。やっぱりセンスがない。新しい日記の一ページ目くらいかっこよく決めてやるかって思って、秋をテーマに書いて見たけど…。

さすが親父の息子。（笑）

今日は、二〇四七年九月二十六日。今、目の前の前に寝ている自分とその横で由美と純が私の手を掴んで泣いている、のを見ながら日記を書いている。

とうとう私は死んだ。

…らしい。

とことん私の頭は凡人の脳ミソで三流ドラマしか描けないのかと悲しくなる。この数十日間程夢を見ていたらしい。「モドリタイデス、モドリタイデス。」と日記に書いたあの日から、現実の、五十九歳の、ガンに侵された私は、危篤状態となり、家族や友人達が集まり心配する中、幸せにも夢を見ていた。

何が俺らのサウンドだ。（笑）

でも神様は意地悪なモンだ。結局夢で終わらせるなら、せめて学園祭ライブやって、アミューズのプロデューサーに「君たちデビュー決定！」とか言われて、居酒屋でみんなで気持ちよくビール飲んで寝る、とこまで夢みさせてくれてもいいのにな。

死んでる私に向かって妻が、言ってる。

「起きろ、バカ亭主！昨日ね、高田さんとこの式場から注文が入ったのよ。あと一ヶ月で千個よ。どうすんのよ。お酒だって飲んだっていいから。ボコボコにしないから。大学四年の頃の浮気も許すから。あなた隠してたつもりでしょうけど、知ってたんだからね。私凄く傷ついたんだからね。そ

れでも、こんなにバカな男でも、やっぱりあなたが好きだから、許したんだからね。…なんで、そんな顔してんのよ、バカ。こんなに私が泣いてるのに、なんであなた笑ってるのよ！バカ。こんなの絶対許さない。絶対、絶対、許さない。私これから…どうしたらいいの？…バカ。」

十日前は、あんなに五十九年の人生を悔やんでいたけど、日記も新しく書き始めたばっかだけど、そろそろこれはもう終わりにしようと思う。

この二人の涙を見て思った。私の人生は、五十九年ずっと幸せだったんだ。流れに流されて中途半端に生きてきたりもした人生だったけど、それでもこんなに愛されて、幸せだ。

純、
母さんを頼むな。
店頼むな。
彼女、大切にしろよ。

由美、
だらしない夫でごめん。
浮気ごめん。
恐妻なとこが、大好きだ。（笑）

二人ともありがとう
俺、ちょっとこっちで飲んでるわ
だから、しばらく
さようなら